

令和元年六月吉日初版作成・八月吉日一部改訂

宇宙神の光により

神意識を深める

(一部改訂)

高嶋善三郎

目次

- 人間性本来の智と直観とが全く一つになる・・・3
- 分別する心を持ったまま本心に統一する・・・4
- 宇宙神の光により神意識を深める・・・5
- **自分を赦すことの大切さ**・・・6
- **光を認め、受け入れる**・・・8
- (付記)
- **み教えを行ずる目的**・・・9
- **チャクラは、神意識が深まるにつれ開かれ進化する**・・・9
- **チャクラの言靈活性化法**・・・11

お願い

より分かりやすくするため、ご感想があれば、お聞かせください。例えば、この点について分かりにくいか、どの点が心に響いたとか、新しい疑問があるなど、何でも結構ですので、お聞かせください。また、送られてきた資料が次回以降不要の場合は、次のケータイのSMSか、アドレスにご連絡ください。

(ケータイ) 09033466619

(アドレス) zensan@peach.ocn.ne.jp

人間性本来の智と直観とが全く一つになる

「人類即神也」の宣言文のなかに、「いかなる、批判、非難、評価をせず」とありますが、この世の中を正しく対処していくには、正しい判断力をもっていかなければ、生きていくことはできません。どのように考えればよいのでしょうか。

この間に示唆を与えてくださるのが、次の五井先生のお言葉です。このお言葉は故酒井博雄氏がご法話テープを文書化したものです。

「いつでも何処でも必要とあらば、常に神人というものは、悪と観えるもの、善と観えるものその両面ともにはっきりと自己の心にうつしだしてその悪と観える事柄も善と観える事柄をもそれさえもが全て消えゆく姿なのであり、すべてが消えゆく姿であると観する想い・・・その想いさえも消えてゆくものであるとまで直観できうる本心の座に住処を置いているのである。

自分はごく普通人であり凡人なのだから神人のような境地にはなれぬと思う人もあるだろうが、人間は誰でもが本来は神人であるのは事実であるからそのように神なる自己を否定し拒否する想念などをまずは消えてゆく姿と想いつづけることから次第に本来の自己（本心）が開眼されてゆくのである。

よって宗教のあるべき道というのは、ただ無批判に何でも善なりとみることではないし、ただ無防備に何でも受け入れるものではない。やはり宗教の道に深く広く分け入れれば入るほどハッキリとした批判力が出てくるものであってまるで心が馬鹿のように無批判になるものではない。

内に確固とした正しい直観的批判力をもちながらもそうした批判力さえも消えてゆく姿と観じていかなる自他の言動にたいしても振り回されず把われのない生き方をしてゆくとここにこそはじめて宗教的という空なる境地が開けてきて自ずと空即是色の真実の世界というものがその人自身の世界というものがその人自身の世界となってくるのである。

人の悪口を言わぬのは、勿論よいことだが一切の批判力までも失わせるような愚かで盲従的な宗教の在り方というのをこの私の場合は決して是とするものではない。信仰する一人一人の人間の心において人間性本来の智と直観とが全く一つになってこそこの世にも真実の世界が現れてくるのである。」

この宣言文で言われているこの文節は、ただ無批判に何でも善なりとみることではないし、ただ無防備に何でも受け入れるものではない。やはり宗教の道に深く広く分け入れれば入るほどハッキリとした批判力が出てくるものであってまるで心が馬鹿のように無批判になるものではない。内に確固とした正しい直観的批判力をもちながらも、そうした批判力さえも消えてゆく

姿と観じていかなる自他の言動に対しても振り回されず把われのない生き方をしてゆくことをいわれているのです。

この考え方こそはじめて宗教的にいう空なる境地が開けてきて自ずと空即是色の真実の世界というものがその人自身の世界となってくるのであると言われているのです。

道を求める私たちにとって、肝に銘じるべきお言葉です。

分別する心をもったまま本心に統一する

五井先生のお言葉『如是我聞』73ページ187)で言われている今の自分は神の中にあるについて、もう少し分かりやすく説明してくれませんか。

「あれは運命だ、これも運命だ、という人がいます。大体の人は、自分が運命の流れの中に入ってしまっただけ、その流れに左右されているようです。

ところが本当は、自分というものと運命というものは違うのです。運命というものは、前生を含んだ過去において作ったものが、今現れて消えてゆく姿だけのものなのです。

運命それ自身が今の自分ではないのです。たとえ運命がよかろうと悪かろうと、今の自分のものではないのです。すべて過去世からの想念行為が現れては消えてゆく

姿なのです。ですから運命環境が悪くても、それは今の自分が悪いからではない。また運命が素晴らしくよくても、それは今の自分が善いから、えらいからというわけではない。それはすべて過去世から想念行為の蓄積が、現れて消えてゆく姿なのです。

ですから運命や環境が悪いから、といって今の自分を嘆き悲しみ、責め卑下することはありません。また運命環境がよいからといって、感謝こそすれ、自惚れたり威張ったりしてはいけません。それはみな消えてゆく姿なのです。

では今の自分はどこになるのか。今の自分は神の中にいるのです。**神の生命と全く一つの個性をもった永遠の生命**なのです。そして現れてくるものはすべて消えてゆく姿。この信仰に徹すると、生き死の恐怖不安に把われなくなり、生き続ける生命がある、という不動心を会得できるのです。
(『如是我聞』73ページ187)

ここで過去の自分と今の自分を区別して説明されています。過去の自分について、自分の運命、善きものであろうが悪いものであろうが、即ちすべて過去世からの想念行為(過去世から現在までに自分が発した想念行為)が現れては消えてゆく姿と説明されています。

そして一方今の自分については、その運命の流れの中に生か

されていますが、同時にすべてを創造できる神の中にあるといわれているのです。

従来の流れに沿って、想念行為をすれば、従来 of 運命を続けることとなります。一方今の自分は神の中にあると意識し、現れてくるものはすべて消えてゆく姿として感謝して生活することと徹すると、生き死の恐怖不安に把われなくなり、生き続ける生命がある、という不動心を会得できると言われています。

ここでいわれている神とはなにかというと、生き続ける生命である、即ち無死無生の心、空の底にある無限の心と等しき心であり、内なる神（本心）です。人間がいかなる不安恐怖の感情に襲われても、動揺もなく、ただ喜びと感謝に包まれ、必要に感じ、無限なる叡智など無限あるすべてを現わし、満たす存在です。

過去の自分はどこにいるかということ、輪廻転生の流れ（貧者病死の苦界）をつくりだしてきた、眼で見、耳で聞き、想いで分別し、認識しようとする心、善悪を判断しようとする心の中にいるのです。この世界は、肉体世界に生きている限り、この世界から抜け出すことはできませんし、拒否することはできません。なぜなら、光としての魂がこの肉体界にこの世界を体験することにより、神意識を深めようとして降りてきているからです。しかし一旦輪廻転生の流れの中に入ると、この世界に降りてきた自分の目的も忘れ、ただ不安恐怖の中で生きていくこ

とになるのです。しかし肉体の中に存在する魂の叫びにより、安心立命、神を求めてきたのです。自分の中に神が内在することを知り、それを実感できた時、不動心を得たといえるのです。

このような心境になるには、分別する心をどのようにコントロールするかにかかっています。五井先生は、分別する心をもったままでいいから、統一により本心の中に入っていきなさい。本心の中には、悪いもの、悪いことが、一切無い。完全円満であり、大智慧、大愛で満たされている。その中に一切の想念を統一してしまうと、そこから生まれてくる智慧能力によって開運もし、安心立命していくと言われているのです。その時自分の人生の中で判断した善悪は、自分がこの肉体界に神の姿、愛を現わすためのプロセスのもので、すべてが本心の中に消えてゆくものであることに私たちは気付くのではないのでしょうか。

宇宙神の光により神意識を深める

神聖目覚めの印を通して降ろされる光を自分のものにする、即ちこの光により自分の神意識を深めるには、どのようにすればよいのでしょうか。

まず、神意識を深めるとはどういうことを言うのでしょうか。五井先生のお言葉『続宗教問答』の問92「神様の中に入るということは、現実逃避ではないかと人にいわれましたが、い

かがなものでしょう。」の中にそれを示唆するお言葉があります。

宇宙の法則に乗るとは、自分が神のみ心と一つになって生きていくことであり、自己のあらゆる動きが、そのまま他の人のためにもなり、人類のために役立っている状態といえる。何故ならば、神のみ心は、大調和であって、すべてを生かしきることに、その目的があるからである。自己の生命を自由に生かしたい、のびのびと平安に生きてゆきたい、と思うならば、まず自己の心を自由の根源であり、生命の根源である、神のみ心の中に入れきってしまうことが必要である。

神のみ心の中に自己を入れ切るということは、神のみ心と同じような心で生きてゆくことである。神のみ心とは、まず、平和な心ということ、すべてを自ら自身と観ずる心、こちら（人間）側からいえば、自他一体の心ということになる。別の言葉で言えば、愛ということになると五井先生は言われています。

以上から神意識を深めるには、宇宙神の光について正しく理解し、神意識を深めるという意味をしっかりと認識することが大切です。

神の光は、平和な心ということ、すべてを自ら自身と観ずる心を現わす、み心のひびきといえます。この光を認め、受け入れれば人間の側からいう、自他一体の心、愛の心を深めさせてくれるものと言えます。

神意識を深めるとは、神の光を認め、自分の潜在意識や顕在意識の中に受け入れ、それによって満たし、自己中心の感情、即ち業想念感情を常に浄め、また、他の人の感情に執着せず把われずに、常に愛の本質である光に変えてゆき得るようになる。別の言葉でいえば、業想念の波の中に生活しながらも、その業想念に把われずその波の中に光明波動を、自然法爾に流し得るということになるのではないだろうか。

自分を赦すことの大切さ

ここで光を正しく受け入れていくため、五井先生が説明されている光と愛の在り方について、もう少しみてみましょう。

光である魂がこの肉体界に降りてきたのは、肉体界特有の感情想念を体験して、より神意識を深めるためと言われています。

ところが、魂が肉体の中で、生活していくうち、肉体という有限の世界の中にのめりこみ、自分の本心（真我）を忘れ、肉体想念で善悪を判断する心が自分であると誤って認識するようになり、そのため常に心の中に葛藤と不安と恐怖を持ちながら生活するようになったと言われています。

過去の聖者賢者は、感情想念の世界に生きながら、それをどう乗り越えてゆくか、み教えの中で説かれているのです。そして自分の本心を取り戻せる方法を教えてくださっているのです。

五井先生は、『人間と真実の生き方』の中で私たち人間が愛をどのように深めていけばよいか説明されています。「愛と真と赦しの言行をなすつづけてゆくとともに・・・」の文節がありますが、この文節をより理解するうえで、参考になるお言葉があります。

「●光とは明るい把われのない心、いつも神のみ心の中に入っている想いから発する本質的な生命力であり、愛とは分かれたものが一つに結ばれ統一されたところに現われる心のあり方である。それが縦に働くと神への信となり、横に働くと隣人愛、人類愛となる。●また愛が感情の波に蔽われてしまえば、それは執着となって、愛の心をマイナス面にひきずっていつてしまいが、愛が感情の波を超えて、その感情を純化して、働きたときには、その感情は光となって、相手を照らし、人類を輝かす。●愛は光そのものであるから、肉体の人間世界に働く時は、感情想念の一つである情とよばれている業想念の波に乗って働かないと、その効果を發揮することが出来ない。それは、電流は眼に見えなくとも流れているのだが、電球という器を通さないとその光がわからないようなもので、本来の光を肉体界の波長に合わせて、肉体界に流れてきて、光本来の役目を果たしてゆくことが、この地球界における愛の働き方なのである。」

このお言葉から、愛と真と赦しの言行をなしていく上で、表面的な言行だけでは全く達成できないことがわかります。

愛を深めてゆくことは、人格を高め、心してかからねばなり

ません。

ここで、その要点を改めて整理してみましよう。

五井先生の愛の教えのひとつの核心は、「自分を赦し、人を赦し、自分を愛し、人を愛す、」というところです。

この肉体世界に住していると、どうしても感情想念に把われてしまい、その自分を責めてしまう。それから解放してくれるのが、この教えなのです。

自分の過去の否定的なものの見方や愛情に欠けた行動などを自分自身が赦した時、安心立命を得、より偉大な自己とのかわりを瞬時に手に入れることができるということです。自分を赦し、残っている否定的な感情的エネルギーを解放することで、自分の浄化された意識の中から、他の人たちを快く赦すことができる。

また自分を愛することは、自分を赦すことにより、始まる。自分自身を赦した時、自分自身が尊いものであるということが受け入れることが出来る。自分達の価値に気づくことができなると、私たちの心の中に障壁をつくり、自分達が快く与える真の愛を行うことができなくなるといわれているのです。

以上の真理をはっきり認識することにより、自分を赦していく上で、世界平和の祈りや本心に統一していくことがいかに重

要かを確信できます。この認識により、いのりや統一は深まっていって行くことでしょう。

すでに「分別心を持ったまま本心に入る」の項でも触れたように、輪廻転生の流れ（貧老病死の苦界）をつくりだしてきた、眼で見、耳で聞き、想いで分別し、認識しようとする心、善悪を判断しようとする心が本心との統一により、光の中に消えていったときに真の赦しが達成できたことになるのです。

光を認め、受け入れる

神聖復活目覚め印を組み、宇宙神の光をこの肉体を通して頂く時に留意することがあります。

勿論既に『正しい統一の姿』において触れております、人間の業想念、様々の想いを自己の本心の中に一つにまとめてゆくことや何事も神様の愛の現われであると信ずるように思いを持ってゆくことなどを同時にやっていくことは大切ですが、さらに宇宙神の光の偉力を受け止める方法があります。

それは、宇宙神の光を認め、受け入れることなのです。せっかく宇宙神の光をいただいても、それを自分の意識の中に受け入れなければ、自分の神意識をより深かめることはできません。

では、宇宙神の光を自分の目に見えないのに、どう認めれば

よいかというと、神聖復活目覚めの印を組む時、最初天に向けて両手をあげますが、両手の掌に光を受けているのです。光は見えないが、エネルギーを感じている方もあるでしょう。両方とも、見えも感じもない方もいるかと思いますが、間違いなく降りて来ているのです。

呼吸法を使い、光を意識しながら、光を吸い、息をとどめ、そして吐くことを続け、光を意識的に自分の中に取り入れていく、あるいは叡智のチャクラに意識を集中し、頭頂のチャクラに強力な光（エネルギー）を受けていることをイメージし、光の快さやありがたさを楽しみましょう。即ち光にフォーカスし、**光を引き寄せ**、ひろげ、自分の脳にある松果体やさらにはハートチャクラの奥にあるハートの中に入れて**肉体感覚がなくなるまで呼吸法により**光で一杯にするのです。そうすると、すべてが癒されて行き、自分が光であるという感覚が出てきます。これは現在地球のアセンションがなされている時だからできるのでしょうか。

こうなれば、しめたものです。インドやキリスト教の聖者によると、潜在意識などがよく浄められてくると、内なる自分（本心）即ち自分のハートから光が無限に放射されていく実感がわいてくると言われています。

宇宙神の光を正しく認め、正しく受け入れていけば、神意識はどこまでも深まっていくのではないのでしょうか。

(付記)

み教えを行ずる目的

「自分を赦すことの大切さ」の項で触れたとおり、光である魂がこの肉体界に降りてきたのは、肉体界特有の感情想念を体験して、より神意識（自他一体の心・愛）を深めるためと言われています。

ところが、魂が肉体の中で、生活していくうち、肉体という有限の世界の中にのめりこみ、自分の本心（真我）を忘れ、肉体想念で善悪を判断する心が自分であると誤って認識するようになり、そのため常に心の中に葛藤と不安と恐怖を持ちながら生活するようになった（輪廻転生の世界に入りこんだ）と言われていきます。

したがって、感情想念をコントロールする方法を身につけ、自分の本心（神）を復活させ（思い出し）、この世界に永遠の生命の覚醒の世界（死者病貧のない大光明の世界）を顕現することが、道を求める私たちの真の目的なのです。家内安全、商売繁盛などの現世利便的なものは、私たちが真の目的を達成するにつれ、必要に応じ、最もふさわしい形で与えられるのです。

もう一つの目的は、現在地球がアセンション（次元上昇）の時期を迎えており、世界人類が苦痛なくアセンションできるようにする（人類救済の）ため、私たち神人は、全宇宙

から志願して降りてきているのです。

チャクラは、神意識が深まるにつれ開かれ進化する

神意識とチャクラとの関係について、みてみましょう。

昌美先生によると、チャクラは、この宇宙神の無限なる生命エネルギーを受けとめ、生命輝かに生きるために不可欠な、魂と精神と肉体を統一・調和する機能を果たし、また我々の神性、霊性を開くために大変必要な器官のあります。

チャクラについて一般的に解説されているものをみてみましょう。

チャクラは、①車輪のように回転して渦巻く肉体のなかのエネルギーセンター。全身へエネルギーを分配して維持するという特別な役割をもつ。②私たちの全体性のなかの感情・肉体・霊・思考をつなぎあわせるための機能をもっている。

肉体の中の七つの主要なエネルギーの渦巻きの働き等は、次のとおり。

第七チャクラ（頭頂）あらゆる霊的かつ宇宙的な情報とエネルギーをとりいれて、今世での霊的なゴールやこの世界で学び達成すべきことを統制するところ。

第六チャクラ（額の下のほうの眉間にあり、「第三の目」または「額のチャクラ」とも呼ばれる）透視や自己イメージ、目に見える現実の認識を支配し、自分をとりまく世界に自分自身

の観念と真実をどのように投影していくかを規制する働きをもつ。

第五チャクラ（喉の中心にあり、「喉のチャクラ」としても知られる。）「コミュニケーションや自己表現、創造的な表現のエネルギーを調整する。

第四チャクラ（胸の中心にあり、「ハートチャクラ」とも呼ばれる。）自己と調和的なエネルギーだけを引き寄せて純化する働きや、自己愛、人々との愛、自己価値、または自分という存在としての気づきと体験、ほかの人々の本質に対する賞賛をつかさどる。魂の座する場でもある。

第三チャクラ（太陽神経叢の中心あるいは横隔膜周辺にあり、「パワー・チャクラ」や「意志のセンター」「太陽神経叢のセンター」とも呼ばれる。）ほかの人へのパワーやコントロールと同時に人からのコントロールをゆるすこともふくむ。聖なるパワーなどすべてのパワーと主権を保ち、エネルギーをコントロールする働きをもつ。また、すべての意志（それが聖なる意志であろうと下位の意志であろうと）や、社会的な生活や目標、人のためにとる行為、感情の活発な表現、自己を敬い尊ぶこと、さらに「エゴのセンター」などもこのチャクラによって統括される。

第二チャクラ（おへそと股間のちょうど中心にあり、「仙骨のチャクラ」とも呼ばれる。）性的で官能的なエネルギー、自分を慈しみ人を慈しむこと、感情という感覚的な資質、霊的感知

力、女性の「創造センター」を調整する。

第一チャクラ（尾骨の最下部にあり、「ルートチャクラ」とも呼ばれる。）安定あるいは不安定のエネルギーを保持する。つまり直観や地球とのつながり、肉体との関係性、肉体の健康、食物や住居、衣服、お金（少なくとも通貨交換システムのある文明では）のよう生活のために必要なもの、可能的なもの、またはもっとも原始的な本能的情緒反応などをつかさどる。（『プレアデス 覚醒への道』407ページ）

昌美先生によると、チャクラの働きは、自らの意識が神性、霊性に目覚め、高次元意識へと次元上昇するにつれて、次第に開いてゆき、それによって自らが自ずと直観し、体験してゆくものであると言われています。

また、2010年私たち神人および神人予備軍全員のチャクラが開かれたのは、五井先生および大光明霊団、宇宙神が凄いエネルギーを与えてくださったのはいうまでもないが、権力欲や自我や顕示欲などに把われないで、五井先生の指導により、霊的な事には一切関心を持たず、代わりに究極の真理を掴んでいくよう努め、即ち善なる愛の生き方、真理に沿った生き方を長年実践し、また自らの肉体への感謝も行ない続けて、神と通じる道を自然に少しずつ開いていて、チャクラも徐々に開きつつ次元上昇してきた結果にと言われています。

この2010年に開かれたのは、上から二番目のチャクラである額のチャクラであり、「叡智のチャクラ」である。チャクラは常に神とつながっているべきものであるが、全身の七つのチャクラの中でも、額と頭頂部のチャクラは神とつながる大切なポイントであり、ここから光の一筋が降り来たる（その他のチャクラは、内臓等の“見える器官”と密接に関わり、調和に導くチャクラである）。額の叡智チャクラが開き、かつまた怒りや悲しみと言った否定的想念が全く作用しなくなると、すべてのチャクラは自然と開いてくると言われています。

また、チャクラは自らの肉体と宇宙神とをつなぐ重要な働きをするものであり、チャクラを開くとは、宇宙神と直接交流し、自らの生命力を高めてゆき、自らの肉体を開発することと云われています。

以上から言えることは、神意識が深まるにつれ、チャクラが開かれ、宇宙神の光を受け止めることが出来、それにより自らの生命力を高めてゆき、自らの肉体を開発することが出来るということになります。そしてさらに神意識は深まっていくことになるのではないのでしょうか。

チャクラの言霊活性化法

日々の統一に参考になる「チャクラの言霊活性化法」について、紹介させていただきます。

この方法は、気功家の野口清氏が考案したもので、各チャクラの働きを直観的に把握でき、私たちの天命を完うしていく上での留意点と関連づけて整理されており、私たちに参考になると考えられます。

第一のチャクラから始め、第七のチャクラまでのチャクラを意識し、それぞれのチャクラに対応した言霊を三回ずつ音読していきます。三日に一度の頻度やっていきます。

- 第一のチャクラを意識して 「地球と私は繋がっている」
- 第二のチャクラを意識して 「全ての生命は一つである」
- 第三のチャクラを意識して 「何があっても神様ありがとう
ございます」
- 第四のチャクラを意識して 「私は全てを愛します」
- 第五のチャクラを意識して 「あるがままの私でいい」
- 第六のチャクラを意識して 「私は宇宙と一体である」
- 第七のチャクラを意識して 「私は宇宙の大調和のために働
きます」

この方法を、宇宙神の光で各チャクラを一杯にすることをイメージしながら実践するのも、ひとつの立派なやり方ではないでしょうか。